

## 2020年度 古事記読書会「弥栄(いやさか)の会」 第2回 報告書

**開催日** 第4土曜日 2020年5月23日(土) 読書会 9時半～11時半

**開催場所** Zoomにて開催

**参加者** 12名(会員11名、他1名)

### 内 容

#### (1)参加者自己紹介

#### (2)朗読

阿部國治著・栗山要編「第一集 袋背負いの心」 Zoomを用いて全員で順番に輪読

#### (3)読後感

- 古事記では、日常生活の指導原理の全てが汲み取られているように感じた。人間の中身は古代から進捗が無いと思えた(大国主命に対する八十神達の妬みなど)
- 因幡の白兔では、騙した白兔にワニが皮を剥ぐ等の仕返しをするが、兔はワニを恨むこともなくむしろ感謝しているところが印象に残った。ワニは先生のような存在だと感じた
- 袋背負いの心とは、出来るだけ沢山の他人の苦勞を背負い込むことを喜びとすることだと思った。他人様の苦勞を背負うことが大切というのはまさに大和魂だと思う。背負うことを偉い、と思っただけではダメであり大事な仕事、しなければならない仕事と受け止めニコニコと背負うところが大切だ
- 農業が最も袋背負いの心で行う仕事だという表現があったが、自分に照らして、平社員には平社員の袋背負いの心があると思った。ニコニコと実践していきたい
- 袋背負いの心と「お袋さま」が結びついているということが印象に残った。子育てはまさに袋背負いの心。親という言葉が、子を産んで自分の子供との間に生じた親子関係に対して「おや!」という驚異を意味する音から出来たもの、ということも興味深かった
- 弥栄の心、について少し触れられていたが、「希望」「向上心」というようなものと理解した
- 「赤猪抱き」の話もまさに大和魂であり、不条理ではあるが自己の本分は実行あるのみ、やらなければならないということを感じた
- 大国主命が赤猪抱きを経て「麗しき男」となった、のは八十神達に見返りを求めることのない「わかった人」になった、という意味であると思う

#### 【次回予定】

**2020年6月27日(土)9時半～11時半。次回もZoomを予定**

連絡先：参加申込方法：開催日の1週間前までに、下記の必要事項を記入の上、メールにてお申し込みください。

【必要事項】所属支部、氏名、緊急連絡先(携帯)

申込先：reading-circle@womencivilengineers.com (担当：小林)

以上